

「易経」一日一言

人生の大則を知る

竹村亞希子 編



致知出版社

2009年2月25日発行/229頁

1,200円/ISBN978-4-88474-840-1

主要目次

- 1月 天地の道は、恒久にして已まざるなり。
- 2月 それ易は聖人の深きを極めて幾を研くゆえんなり。
- 3月 君子もって事を作すに始めを謀る。
- 4月 天に応じて時に行う。ここをもつて元いに亨るなり。
- 5月 積善の家には必ず余慶あり。
- 6月 天を楽しみて命を知る。故に憂えず。
- 7月 天行は健なり。君子もって自彊して息まず。
- 8月 潜龍用うる勿かれ。 他

編者紹介

たけむら あきこ

愛知県生まれ。中国古典『易経』をわかりやすく解説する一方、企業経営者や経営幹部に『易経』に基づくアドバイスを発行しており、その実績から多くの厚い信頼を得ている。講演活動の一方で、NHK文化センター『易経』講師を務める。著書に『人生に生かす易経』（致知出版社）、日経オーディオブック『江守徹の朗読で楽しむ易経入門』シリーズなどがある。

in brief

東洋の古典の中で最も古く、「四書五経」の1つに数えられる『易経』。本書は、この書から366の箴言を選び、紹介する。

●『易経』の箴言には、例えば、次のようなものがある。

- ・天地の道は、恒久にして已まざるなり。
- ・往を彰かにして来を察し、顕を微にして幽を聞く。
- ・方は類をもつて聚まり、物は群をもつて分かれて、吉凶生ず。
- ・勞謙す。君子終わりありて吉なり。
- ・易は窮まれば変ず。変ずれば通ず。通ずれば久し。
- ・君子もって事を作すに始めを謀る。
- ・君子は器を身に蔵し、時を待ちて動く。
- ・積善の家には必ず余慶あり。積不善の家には必ず余殃あり。
- ・善も積まざればもつて名を成すに足らず。悪も積まざればもつて身を滅ぼすに足らず。
- ・止まりて糞い、動きて窮まらざるなり。
- ・吉凶悔吝とは、動に生ずる者なり。
- ・吉凶とはその失得を言うなり。
- ・天を楽しみて命を知る。故に憂えず。
- ・危うき者は、その位に安んずる者なり。亡ぶる者は、その存を保つ者なり。乱るる者は、その治を保つ者なり。
- ・君子は終わりあり。
- ・時に六龍に乗り、もつて天を御す。
- ・潜龍用うる勿かれ。
- ・見龍田に在り。
- ・国の光を覲る。
- ・二人心を同じくすれば、その利きこと金を断つ。同心の言は、その臭り蘭のごとし。
- ・三人いけば、一人を損す。一人行けばその友を得。
- ・君子豹変す。小人は面を革む。
- ・君子はその身を安くして而る後に動き、その心を易くして而る後に語り、その交を定めて而る後に求む。

時と兆しの専門書、『易経』

『易経』^{えいきよう}は、易占のための書として発展した書物であるが、古代中国の君主がこぞって学んだ帝王学の書でもある。

それは、この書物をよく学べば、占わずして時の変化の兆しを察する洞察力、直観力を身につけることができるからだ。

この易経の根底には、陰陽思想がある。

易経では、世界の大本には「太極」——まだ陰にも陽にも分かれていない混沌としたエネルギーがあり、そこから陰陽が分かれる、とする。

すなわち、陰と陽は実際には1つの存在であり、1つの物や事象には陰と陽の両面がある。

例えば、人間ならば、長所（陽）と短所（陰）の両方を持ち合わせている。

これら対立する陰陽が、対になって作用し合うことで全ての変化が生じる。静（陰）があるから動（陽）がある。季節は冬（陰）から夏（陽）へと、そして夏は冬へと向かい、春夏秋冬が巡る。

また、陰陽は変化して循環するだけでなく、交ざり合うことで新たなものを生む。男女が交わって新しい生命が誕生するように。

このような陰陽思想に基づく易経には、変化を読み取り、対応する術を見出すための智慧^{ちゑ}が詰まっている。例えば——

●天地の道は、恒久にして已まざるなり。

天地の道は永遠に続いてやまない、ということである。

「恒久」は、永遠に変わらないの意。しかし、止まって動かないわけではなく、1年が春夏秋冬と巡るように、常に変化発展していく。

ただし、その順序が変わらないように、変化の中にも久しく継続して変わらないものがある。

人間の生き方も同様で、時代を経ても決して変わらない根本がある。

●往を彰かにして来を察し、顕を微にして幽を闡く。

「往」は過ぎ去った時。「顕」は顕著に現れている現在の状況。「微」はその状況を作った微細な要因。「幽」は眼に見えない物事の根本。

すなわち、過去を明らかにし、現在を把握し、それをもとに未来を察知する、ということである。

今、眼にしている現象も、微小な原因から育ったものである。原因を知れば、現象の裏側にある根本が見え、そして、将来の有り様を察することもできるようになる。

●方は類をもって聚まり、物は群をもって分かれて、吉凶生ず。

「方」は方向性。物事には必ず性質、方向性がある。同じ方向に進むものは同類が集まり、種類に分かれて群をなす。事象は方と群で現れ、そのあり方によって吉凶も生じる。

例えば、良い品物を作りたいという会社には、同じ志を持つ人、良い品作りのための物が集まってくる。このように、どういう方向性を持つ群かと事象を観察するならば、吉凶は自明の理である。

●勞謙す。君子終わりありて吉なり。

「勞謙す」とは、謙虚に勞する。功勞があっても誇らず、自分の地位や身分が高くなっても謙虚さを終わりまで全うすること。

人は満ち足りれば、ほとんどの場合、慢心する。謙虚さを全うすることはなかなかできない。

謙虚に生きることは、いわば自分との戦いだ。これでいいと満足せず、向上し続ける姿勢である。

●易は窮まれば變ず。變ずれば通ず。通ずれば久し。

陰が極まれば陽になり、陽が極まれば陰に変わる。冬が極まれば夏へ、夏が極まれば冬へ向かう。

同様に、物事は行き詰まることがない。窮まれば必ず変じて化する。変化したら、必ず新しい発展がある。それが幾久しく通じて行って、それがまた生々流転する。

「通ず」とは成長を意味する。新たな変化なくして成長発展はない。

易が最も尊ぶのは、新たな変化である。

●君子もつて事を作すに始めを謀る。

何か事を為す場合に、優れた人は後に争いが起こらないように、最初によく考えてから計画する。

物事には始めに兆しがある。後になってトラブルになり訴えるような場合でも、その物事が始まった時点で、すでにトラブルの素因が内包されて

いることが多い。

この言葉は、争い事で訴える側に立った場合、たとえ勝ったとしても損害を被る、と教える。

●君子は器を身に蒔し、時を待ちて動く。

「器」とは弓矢のことで、利器を意味する。これは、世の中に役立つ力や才能、また問題を解決する手段の喩えである。

この言葉は、不断の修養により、力を蓄えておき、時が来たら行動するのが良いと教えている。

●積善の家には必ず余慶あり。積不善の家には必ず余殃あり。

この言葉は、「善を積む家には子々孫々の後まで喜びがあり、不善を積む家には後世まで災禍がある」という因果応報の意味で使われる。

だが本来は、日々小さな善を積んでいけば必ず喜びに行き着き、日々不善を積んでいけば、必ず禍に行き着くという意味である。

何事も積み重ねていくと層が厚くなる。だからこそ、何を積んでいくのか、層の薄いうちに細心の注意を払わねばならない、という教えである。

●善も積まざればもって名を成すに足らず。悪も積まざればもって身を滅ぼすに足らず。

善行を少し積んだだけでは、名誉は得られない。小さな善を日々継続して積み重ねた結果が大きな善行となり、名誉を得ることができる。

悪行が身を滅ぼすに至るのも同様で、小さな悪が積み重なった結果、大悪となるのである。

●止まりて異い、動きて窮まらざるなり。

自分から先に先にと進むのではなく、落ち着いてどしり構え、よく環境や状況を見て、それに合わせて無理なく進めば、窮まることはない。

まるで止まっているかのようにゆっくり進むことが必要なのである。

●吉凶悔吝とは、動に生ずる者なり。

「吉」は得る、「凶」は失う、「悔」は後悔する、「吝」は吝嗇・けちる・厭がる。すなわち「吉凶悔吝」は、人の心と行動の巡り合わせを表す。

つまり、人は過ちを後悔して吉になり、吉になると油断して奢りや慢心が起こって吝嗇になり、過ちを改めることをぐずぐずと厭がり、凶になる。

凶になって、そこでまた後悔するのである。

禍や幸福の吉凶は、天から降ってくるかのように錯覚している人がいるが、決してそうではない。吉凶悔吝は、自らの行動から生ずるものである。

●吉凶とはその失得を言うなり。

吉は良い事が起き、凶は悪い事が起きるというのが一般の解釈だが、このように吉凶を受動的に捉えようと、時の変化に翻弄される。

吉とは正しい道を得る、凶は正しい道を失うこと。春に種を蒔けば実りを得るし、冬に種を蒔けば実りを失うということである。

結果を得るか失うかという能動的視点に立ち、対処を探求して努力邁進するならば、「禍を転じて福と為す」道も見出せる。

●天を楽しみて命を知る。故に憂えず。

天の理法を楽しみ（楽天）、自分の運命を生きる喜びを知る（知命）ならば、人に憂いはない。

「楽天」と「知命」は同じ精神だ。いかなる運命でも受け容れ、喜び感謝して生きていく。これは、天の働き・情理を楽しむ精神である。

この言葉は、楽天家、楽天主義の出典である。

●危うき者は、その位に安んずる者なり。亡ぶる者は、その存を保つ者なり。乱るる者は、その治を保つ者なり。

盤石と安心しきっていると地位が危うくなる。いつまでも存続すると思っていると亡ぶ。よく治まっていると気を抜けば乱れていく。

時は常に変化して状況は変わる。盤石の安泰などあり得ない。自戒して対処に備えるべきである。

●君子は終わりあり。

「終わりあり（有終）」とは初志を変えず、一貫して物事を成し遂げ、終わりを全うすること。

名声などない時は謙虚になれるが、成功して高位に上り詰めると、知らぬうちに慢心が現れる。

しかし、まだまだ自分は事足りていないとわかっているならば、最後まで謙虚さを保ち続けることができるはずだ。そのような姿勢を貫くならば、有終を迎えることができる。

●時に六龍に乗り、もって天を御す。

龍は雲を呼び、雨を降らすといわれる。そこか

ら龍は「天」と「陽」を象徴する生き物とされる。

易経では、龍になぞらえて、志の達成までの変化の過程が次の6段階で記されている。

- ・第1段階「潜龍」：高い志を描き、実現のための力を蓄える段階。
- ・第2段階「見龍」：基本を修養する段階。
- ・第3段階「君子終日乾乾」：創意工夫し、独自性を生み出そうとする段階。
- ・第4段階「躍龍」：独自の世界を創る手前の試みの段階。
- ・第5段階「飛龍」：1つの志を達成し、隆盛を極めた段階。
- ・第6段階「亢龍」：1つの達成に行き着き、窮まって衰退していく段階。

この6段階を「六龍」という。この6つの過程は、大願成就の天の軌道である。

●潜龍用うる勿かれ。

「潜龍」とは、潜んでいる龍のこと。つまり、才能を秘めながらまだ世に現れていない下積みの時代の君子を喩えた言葉である。

「潜龍用うる勿かれ」とは、いくら才能があったとしても、この段階にある人を重用してはならないという教えである。焦って早成を求めると、必ず失敗してしまう。

また、自分が潜龍の段階にあるならば、ひたすら力を蓄える時と自覚し、力を外に向かって誇示しようとしてはならない、ということになる。

●見龍田に在り。

「見龍」とは、地中に潜み隠れて、志を養った潜龍が地上の水田に表れたもの。

見龍は、見て学ぶ龍、見習う龍である。何を学ぶかという「田の耕作」を学ぶ。春夏秋冬、その時々何をするべきかという物事の基礎を、師から学ぶのである。

基礎を学ぶ時は、見様見真似に行うことが最も大切。徹底的に師のコピーに徹することにより、しっかりとした基礎を身につけなくてはいけない。

●国の光を観る。

・観光旅行の「観光」の語源になった言葉である。

「国の光を観る」とは、一国の風俗や習慣、ま

た民の働く姿を観て、国勢や将来を知ること。

会社組織でいえば、社員の机の状況を観ただけで、その会社のリーダーのありさまや経営方針を察知するようなものである。

これには深い洞察力が要求される。そのように兆しを察する能力を「観光」という。

●二人心を同じくすれば、その利きこと金を断つ。同心の言は、その臭り蘭のごとし。

高い志を持つ2人の人間が心を同じくすれば、硬い金属をも断ち、不可能を可能にするほどの働きをする。また、互いが真心から語り合う言葉は、蘭の花の香りのように深く、透明で、芳しい。

友、同志の結束の堅さを表した言葉である。

●三人いけば、一人を損す。一人行けばその友を得。

3人で何かを行おうとすると、途中で揉めて1人が減る。一方、1人で行えば協力者を得ることができる、という意味。

これは、陰陽に基づく易の本質論である。陰と陽で一对であるから、3は必ず1を損し、1は必ず2になるというわけだ。

従って、深い話をするには、3人でなく、1対1で相対すれば理解し合えるということになる。これは、様々な物事に応用できる考え方である。

●君子豹変す。小人は面を革む。

君子は改革・変革の時に応じて過ちを改め、豹のように毛色を美しく変える、ということである。

「君子豹変」は現在では悪く変わる意味で使われるが、本来は良い方向へ改める意味がある。

一方、小人は、心にもないのに顔つきだけを改めるといつている。

●君子はその身を安くして而る後に動き、その心を易くして而る後に語り、その交を定めて而る後に求む。

優れたリーダーは、3つの能力を修めている。

第1に、危ない時には動かない。負ける喧嘩はしない。

第2に、よく考え、確信を持ってから平易な言葉で語る。思いつきで語ることはない。

第3に、人とは親しく交際し、その信頼を深めてから物事を求める。